

＜佐伯市との出会いと将来の佐伯を担う人材を育成する＞

- 私がなぜ佐伯市に来たかという、1年半前の総合的な学習教育学会で、佐伯から4名も来ていたということで、佐伯の意欲を感じたからである。
- 佐伯泰英著の「居眠り磐音 江戸双紙」という本の中に、佐伯が舞台と考えられる豊後関前藩の坂崎磐音という人物が出てくる。この人物は藩政改革を試みようとするが、抵抗勢力の陰謀によって挫折し、浪人として江戸に行くことになる。
- 佐伯の先生方には、この坂崎磐音の逆をやって、総合的な学習の時間で将来の佐伯市を担う人材を育ててほしい。どのような人材が求められているかという、しっかり経験や知識を積んで、専門性をつなげていく人である。
- そのためには、教科の学びもそうだが、総合的な学習の時間の学びもしっかりやってほしい。今日の鶴谷中の授業で2年生は、将来の佐伯の活性化のために提案を発表していたが、このような学習の経験を積んでほしい。
- 子ども時代に、現実社会の問題に関して、教科で学んだ知識をうまく使いながら、今の日本や佐伯の実態をしっかり分析して、自分たちなりの課題解決策をみんなで知恵を合わせて作ったという経験が大事である。
- そのときに「夢」で終わってはだめ。「何か小学校や中学校の時に、総合的な学習の時間がおもしろかったなあ」ではなくて、小・中学校でしっかり考えたことを実現するため、高校や大学で専門性を身に付けて、佐伯に戻ってきて町の活性化に取り組んでいこうという目標をもつことが大切。
- 目標だけでなく、具体的なプラン、そしてそのプランを達成するためには、異なる能力をもった人がお互いに認め合いながら本気で問題解決を図っていくという経験が大切である。
- 子どもの頃に本気で問題解決を図ったという経験があってこそ、大人になったときに、専門や他の職種・立場を超えてつながり、この町の活性化に取り組んでいく人材が育つのである。
- 育てようとしめない限りは、このような人材は育たない。この町にいても仕方がないということを出ていって、人口が減るばかりである。町は衰退する。その逆をいかに佐伯市でやっていくかを期待している。
- 私は様々な県や市に行くが、佐伯市は本気で総合的な学習の時間で将来の人材を育成するという気もちが分かるので来ている。研究者としては、ぜひ佐伯市でモデルを作りたい。



＜平成26年11月20日の文部科学省の下村大臣の諮問の概要＞

- 平成26年11月20日に文部科学省の下村大臣が中教審へ諮問をした。その中で、我が国の将来を担う子どもに求める力として、「我が国の将来を担う子供たちには、激しい社会の変化を乗り越え、伝統や文化に立脚し、高い志や意欲をもつ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り開いていく力」を備えた人材が求められている。
- 少子化・資源がない中で、今の子どもたちが先行きに対して意欲をなくしたり、夢をなくしてしまったりすると大変なことになる。もともと子どもの数が少ないのに、一人一人がやる気がなかったらどうなるか。
- 下村大臣は、「判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べる力が低いこと、自己肯定感や学習意欲、社会参画の意識等が国際的に見て低い」ことを課題として挙げている。
- その意味ではそういう子どもたちを育ててこなかったということである。高校、それも進学校ほど、教師が一人でしゃべって、子どもはただひたすら写しているだけである。
- 判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べることをさせていないなら、そのような力が付くわけがない。自分たちの授業をどう見直すかが必要である。
- もう少し細かく見ると「何事にも主体的に取り組もうとする意欲」が求められている。すぐにあきらめないで、どんな問題でも何とかしようという意欲が大切である。
- 総合的な学習の時間に適切に取り組んでいない学校は学力が低い、特にB問題が低いというのが全国的なデータが出ているが、それは当然である。
- 熱心に取り組んでいる学校は、大人でもなかなか解決していないような問題を、みんなでいろいろなデータを読み合ったり、インターネットで調べたり、アンケートを取ったりして調べながら、問題解決を図ろうとする授業を行う。その問題解決をする経験がB問題やPISAの調査の時に発揮されるのである。

＜多様性を尊重する態度の重要性＞

- これからの子どもたちに最も大事な力を1つ選ぶとしたら、「多様性を尊重する態度」である。いわゆる異なる考えの人や、異なる考えを大事にすることである。
- 今は、自分を周囲と合わせようとする風潮がある。人と違うと思われるのを嫌がる。周囲と合わせようする「社会性」はあるけども、「社会力」がない子どもたちが多い。みんな考え方が違うのだから、違うことを言ったら、変な奴だと思われたり、生意気だと思われたりするの嫌だと思っていると、様々な問題にぶつかったときに、それぞれがもっている知識や経験を生かして問題解決をしようということが行われぬ。
- 大人社会がまさにそうである。あまり自分の意見を言わない。だから、私は教員にワークショップ型研修を入れたのだから、あまりいろいろ積極的に言うと、その分だけ仕事量が増える。だから黙っているのだと思うが、それでは世の中の問題は解決できない。
- この多様性を尊重する態度があって、他者とも協働できる。本当のリーダーシップというのは、自分の考えがあって引っ張るのではなく、いろいろな人の考えを理解した上で、それを繋いでいく力のことである。人を使うというよりも、人の考えを使うことである。
- チームワークというのは、それぞれがもっている知識や技能をお互いに出し合って、問題を解決することである。コミュニケーション能力は、自分の考えをきちんと伝えることであり、人の話を聞くことである。人は、自分の考えをもっているからこそ人の話にも興味をもつのであり、それが「聞く」ことにつながる。これは総合的な学習の時間だけでなく、すべての学びに共通する。
- グローバル社会の中で、言語や文化が異なる人とも協働できないといけぬ。外国で躊躇せず、意見を述べ、他者と交流することは大切である。そのためにも、まずは日本語で躊躇せず自分の意見をきちんと述べるのが求められる。
- 我が国の伝統文化も大切である。地域の伝統文化を体系的に学んでいるかどうか。小・中学校でそのような地域の伝統文化を体系的に学んだ経験があるから、我が国の伝統文化もわかるし、興味関心をもてる。この意味では総合的な学習の時間については、今回の諮問において、非常に重要な位置を占めている。
- 「アクティブラーニング」とは新しいことではなく、協働的に問題を解決することである。これまでも総合的な学習の時間でやってきたことである。

＜総合的な学習の時間の全国調査（学会実施）について＞

- 総合的な学習の時間の取組の状況について全国で調査を行った。
- 「情報を比べたり、結び付けたりして、自分の考えを広げる」という項目があるが、情報を集めることだけや、比べてつなげることだけでなく、それらを使って自分の考えを広げることが重要である。総合的な学習の時間に積極的に取り組んでいる学校ほど肯定的な回答が高い。
- 「みんなと異なる意見でも自分の考えをはっきり伝えることができる」という項目も、総合的な学習の時間に積極的に取り組んでいる学校ほど高い。
- 「自分と異なる友だちの意見でも受け止め、自分の考えの参考にする」ことも大切である。これも総合的な学習の時間に積極手に取り組んでいる学校ほど高い。
- 「地域の中で自分にできることはないかと考えたことがある」という項目も同様である。これらは全部授業の実施状況の裏返しで、数値が高いということは、地域の中で自分にできることはないかを考えさせている。そのような学習活動をしているということである。
- 「今まであまり考えなかった問題に取り組んでいる」という項目も同様の結果である。知っている問題やできる問題だけでなく、できそうにない問題や分からない問題にもチャレンジする子どもを育てなければならない。
- 「情報を集めて整理するだけでなく、新しい提案や解決方法を考えることが好きである」という子どもたちを育てていかなければならない。
- 逆に、多くの学校で「自分は友達に頼りにされていると思う」という項目に低い数値が出ている。総合的な学習の時間を行った後の振り返りで、子どもたち同士がお互いのよさを評価していく必要がある。総合的な学習の時間は、教科や部活とは違った友だちのよさが見付かる。それをうまく引き出して、伝えることが大切である。
- よさを伝える時も教師以外の大人、保護者や地域の人たちが伝えるとよい。こういう人たちが絡んでくると、この数値が上がってくる。日本の子どもの自己肯定感は低いので、高めていく必要がある。



＜同調査の中学校・高等学校の調査結果について＞

- 中高でも調査を行った。「日常生活の中で、知りたいなと思うことや不思議だな、なぜだろうと思うことがある」という項目は、総合的な学習の時間に積極的に取り組んでいる中高では8割から9割肯定的な反応が出ている。これがベースである。物事に対する興味関心がベースとなり、教科学習の学習意欲にもつながる。
- 「解決したいことを辞書やインターネットなどで調べることができる」という項目は、総合的な学習の時間に積極的に取り組んでいる学校では、9割である。しかし「電話やメール、インタビューで尋ねることができる」になると、5割前後に減る。インターネットや本はそこに人がいないが、電話やメールインタビューは人がいる。だから、人を介して情報をもらったり、問題解決したりすることは苦手で、あまりさせていないということも言えるのではない。
- 教師も本やインターネットの方が楽である。電話、メール、インタビューはいろんな準備、コーディネートが必要になる。先進校でもあまりなされていないのではない。もっと人を介した学習活動を増やしてほしい。
- 「自分の将来について考えたことがある」という項目では、総合的な学習の時間に積極的に取り組んでいる学校では非常に高い。総合的な学習の時間で地域のことを学習したり、職場体験を行ったりすることは自分への問い直しである。自分はどんな人間で、どんなところで生きていけば、自分のもっている力を生かして、楽しく過ごせるかをいかに中学校3年生までに考えさせるかが大切である。
- だから、総合的な学習の時間でどんなテーマで関わろうとも、常に自分との関わりで考えさせることを入れていくことが必要となる。
- 「人の役に立てる人になりたい」という項目も総合的な学習の時間に積極的に取り組んでいる学校ほど高い。地域貢献的・社会貢献的な総合的な学習の時間をやればやるほど社会参画意識が高まっていく。

＜肯定的な意見が低い項目は家庭・地域との連携と言語活動の充実＞

- 「自分は地域や社会から必要とされている」という項目が、肯定的意見が5割である。自分は地域に対していろいろ取り組んでいるが、地域から自分が認められているかという落ちてしまう。これは地域にもっともっと出かけて行って、地域の人に褒めてもらうことが大切である。他者の評価が大切である。
- 「話し合うときに、班やクラスの意見をまとめることができる」という項目も低い。自分の意見は言うことができ、人の意見も聞くことができる。しかし、いろいろな人の話をまとめることが苦手である。大人でもなかなか難しいが、それは日々の積み重ねである。数値の高い学校は、高くなるような指導を行っている。総合的な学習の時間だけの問題でなく、各教科の授業でこのようなことをどれだけさせるかが大切である。日常的に班で話し合ったことをきちんとローテーションで発表したり、班を超えてつないでいったりする必要がある。
- 「教科で学習をしたことを生かして、総合的な学習の時間で調査や分析をしている」という項目も低い。総合的な学習の時間の取組が全国でトップ10と言われている学校でも低い。中学校や高等学校では、あまり教科のことを意識されていないのではない。鶴谷中学校の年間指導計画の中に、教科や道徳、特別活動などの関連が具体的に書かれていない。書かれていないということは、具体的な活動の中で教師が意図的に教科で学んだ知識や技能との関連を示すことが無く、多くの子どもがそれに気付かないまま終わってしまう場合が多い。
- 「家族と総合的な学習の時間のことについて話すことがある。」という項目が、4割強である。これを高いとみるか低いとみるかは判断が分かれるところである。

＜総合的な学習の時間と学力の関係は高い相関関係にある＞

- 総合的な学習の時間に対して10年ほど前は逆風が吹いていた。なぜかという、「総合的な学習の時間＝学力低下」と言われたからである。ちょうどそのときPISA調査の結果が発表され、日本の成績が芳しくなかった。それがゆとり教育の象徴が総合的な学習の時間と言われ、総合的な学習の時間を研究していた学校の研究テーマが一気に国語・算数に変わってしまった。
- しかし、約1年前から状況は大きく変わってきている。大きく変わったきっかけのデータが、平成25年度の全国学力・学習状況調査と総合的な学習の時間のクロス集計である。総合的な学習の時間に取り組んでいる学校と学力の相関を見ると、かなり関係があり、そのような学校は学力が高く、なおかつB問題が高いことがわかった。
- 諸外国の研究者の指摘によると、現在日本のPISA調査の結果が高いのは、総合的な学習の時間があるからと言われている。結局は答えのない問題を少しでも解決の方向へ進ませようという学びが、PISA調査による影響を与えていると言われている。今や総合的な学習の時間は日本の教育の看板である。

＜福山市立新市小学校の生活・総合的な学習の時間の取組例＞

- 広島県福山市立新市小学校は、大変伸びた学校である。7年前のこの学校は、自尊感情が県平均よりも20ポイント低かった。そこで、校長先生と共に、生活科・総合的な学習の時間の改善に取り組み、その中で体験活動をしっかりやって達成感、自尊感情を高めようと研究をスタートさせた。
- そして生活科・総合的な学習の時間に取り組んだ結果、平成26年度には58%だった自尊感情の平均値が85%に上がった。生活科・総合的な学習の時間を5年間取り組んだ結果、30ポイント近く上昇したのである。
- 学力はどうかというと、相対的に右肩上がりになっており、平成25年度は県を10ポイント以上上回った。26年度はさらに伸びている。生活科・総合的な学習の時間で成果を上げている。
- 新市小の子どもたちにアンケートを取ると、国語科が他の教科や生活に役立つが95%、算数科は100%役立つと回答している。いかにこの学校が教科と教科、教科と総合を意識してやっているかということである。
- 1年生の生活科から地域の特産物を取り上げ、どの学年でも地域貢献的な活動をしている。3年生は野菜の地産地消、4年はライス元気、5年生は日本食の研究、6年生は伝統工芸を学習した。
- 最初に何をやったのかということと言語活動の充実である。充実といっても子どもたちが勝手にしゃべるのではなく、班の話し合いで子どもが子ども同士の思考をつないでいる。いつも私が言っているのは、教師がまとめすぎる。教師が板書して子どもの意見をつないでいくのはだめと私は言っている。
- 1年生から班の話し合いを子どもが行う学習をしている。子ども同士で子どもが思考をつないでいくのである。教師がつないでいる間は、子どもの思考ではない。このような活動や取組を小中高でどのようにつないでいくかが重要である。
- 若手が多く、5年以上の経験がある教師は3人しかいない。それで学力を上げているのはなぜかということ、一人一人の先生方の力もあるが、組織的なカリキュラムマネジメントである。学校全体で力を付けるために授業づくりのベクトルとそのため方法を揃えていくことが大切。
- 本校では子どもたち同士がしっかり評価できる。評価できるのはなぜかということ、総合的な学習の時間で何かを開発したり、自己評価や相互評価したりするポイント＝ルーブリックを子どもたちが作っている。自分たちが授業で大切なことを共有して、それを評価規準として用いている。
- 1年生からKJ法等の思考ツールも用いている。そして付箋のやり取りも1年生から行っている。また、話し合いの手順も決められている。①発表する人の方を向く。②よいところを見付ける。③アドバイスができる。1年生でも③までをねらう。アドバイスしようと思ったら、きちんと聞くようになる。
- 全教科の学習の仕方や宿題の仕方、体育の並び方なども書いてある「手引」を作成している。若い先生が多いからである。若い先生が中堅・ベテランの先生から学んだことを言語化したのである。その中には道德の話し合いの仕方もある。

＜新潟大学附属長岡中学校の総合的な学習の時間の取組例＞

- 新潟大学附属長岡中の実践を紹介する。総合的な学習の時間は附属よりも公立の方が市教委の協力を得やすいので、取組みやすいと言われる。附属でもここまで取り組んでいるということを知りたい。長岡中ではチームに分かれて、様々な物を開発している。酒造会社と中学生が開発したのは「塩糀チーズケーキ」。地元企業と協力して「ほっこり弁当」なども中学生が開発している。旅行会社と協力してツアーも企画した班もある。しかし、それがそのまま将来の仕事への願いになるわけではなく、総合的な学習の時間で身に付けた力を将来に生かしている。
- 私が佐伯市に期待しているのは、こういうような総合的な学習の時間をどこの中学校でもやっていただいて、市全体が企業から行政みんなが中学生のこういう総合的な学習の時間をバックアップするような体制を作ることである。そうすれば、この佐伯市は10年後劇的に変わる。
- ぜひともこのような取組が中学を超えて行われ、それも市教委を中心になってやってほしいと思っている。
- 本校のある子の作文に次のようなものがあった。「人とつながる方法は主に2つある。1つは、今ある会社やチームの中で構築されている人間関係の輪に入り、自分もその一部となる方法だ。もう1つは、新たな価値観を見出し、周りの人々の心や考え方を変えることで新たな人間関係を構築していくこと。僕はこれから第3の人間が必要になると考えている。それは人と人、会社と会社をつなぐ人物だ。異質な物や人をつなごうとすれば、当然反発も起きるだろうし、物事も進まないかもしれない。しかし、それを克服し、つなげることができたとき、素晴らしいものができる。明治維新に薩長をつなげた坂本龍馬のように、自分がトップになれるわけではないが、正

しい未来のために人をつなぎ改革を引き起こせる人物がこれからの未来に必要な」我々が育てなければならないのは、まさにこういう人材である。仮に佐伯市にあまりいろいろな物が無いとしたら、新しいものを作る人材を育てないといけない。その意識や意欲は、今小学校や中学校で育てない限り、育たないし、みんな故郷を捨ててどこかに行ってしまう。

- この作文は、駅前のラーメン屋と手を携え、新食感と味の「いれたま正月気分」を共同開発した生徒の言葉である。高尚なことをやっているわけではない。総合的な学習の時間の学びで身に付けた力である。
- 北海道の清里中2年生では道徳を学習していた。班で話し合いをしていたのだが、ある生徒が発言すると別の生徒が「すごいな、なるほど」とつぶやいた。このやりとりを聞いていた生徒は1分ほど黙っていた。すると、はじめの生徒が「今こういうことを考えているんじゃない」と言った。相手の頭の中で考えていることがわかるのである。黙っていた生徒は「そうか、今こういうことを言ってくれたので、ぼくは今までこう考えていたけど、こう変わった。ありがとう」と言ったのである。
- 総合的な学習の時間だけではなく、どの教科でもこのような話し合いを行うことによって学力は上がる。一人一人が自分の考えをもつ。そして人の話を聞いて、それを自分の言葉でまとめたり、つなげたりできる。これを日々の繰り返しで行っていけば、力は付くのである。最後は個人で振り返ることも重要である。
- 教科、道徳、総合的な学習の時間における学習のインフラ整備も重要である。「友達の話は最後までしっかり聞く」「みんなに聞こえる声でわかるように伝える」「わからないときは、わかるまで質問をする」「友だちの話を受け止めてから自分の気持ちを伝える」「違う考えや異なる意見をできるだけ大切に使う」という清里中の語り合いの5箇条、これが一番効いている。こうしたことを繰り返していくことが大切である。
- 「坂崎磐音の二の舞を踏むな」を心がけてほしい。



